ヒューマニティーズセンター
Humanities Center

東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター

潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題（和文）： **詩の作られる場所――ヴァレリーとメルロ＝ポンティの詩学講義**
研究課題（英文）： **Where poetry is made — Valéry and Merleau-Ponty's lectures on poetics**
申請者名・所属先：**塚本昌則・人文社会系研究科**
海外招聘者名： **Benedetta Zaccarello（ベネデッタ・ザッカレロ）・CNRS（フランス国立科学研究センター）研究員**

1. 研究の目的

フランスの詩人・作家ポール・ヴァレリー（1871-1945）は、晩年の七年間、コレージュ・ド・フランスで詩学講義を行った。従来、詩学と言えば、脚韻、音韻など、韻文詩の規則を述べる詩法や、詩人とその時代について語る文学史の手法が主流だった。ヴァレリーが試みたのは、詩を書くとき、その人のうちで何が起こっているのかを明らかにするという、ヴァレリー以前にはまともに検討されたことのない探究である。その試みは、ヴァレリーの死を超え、サルトル（『文学とは何か』1948）、バルト（『エクリチュールのゼロ度』1953）、メルロ＝ポンティ（『言語の文学的使用法の研究』1953）、モーリス・ブランショ（『文学空間』1955）等に受け継がれ、フーコーやデリダにまで影響を及ぼしている。本研究では、ヴァレリーの『詩学講義』と、メルロ＝ポンティがヴァレリー論を展開した講義『言語の文学的使用法の研究』に焦点を当て、詩の作られる場所に関する作家と哲学者の視点について検討する。

2. 研究開始当初の背景

ヴァレリーの詩学講義がどのようなものであったのか、これまでわずかな証言と、全 17 巻の準備ノートしか知られていなかった。ところがごく最近になって、コレージュ・ド・フランスのウィリアム・マルクス教授が 1937～1938 年、1944～1945 年の二年分の講義速記録を発見、他の年度の準備草稿の抜粋とともに、2023 年 1 月、全 2 巻 1500 頁の本として出版した。そこにはこれまで知られていなかった、ヴァレリーの口頭パフォーマンスが記されていて、ヴァレリーが詩に関するどのような考察を展開したのか、解読の作業が待たれている。また、この講義録は、1940 年 5 月に降伏し、ナチスに占領され、1944 年 8 月以降に解放されたパリにおいて、言葉をめぐって考えることが何を意味していたのかを示すドキュメントともなっている

メルロ＝ポンティの『言語の文学的使用法の研究』については、招聘研究者であるベネデッタ・ザッカレロ氏が編者の一人となって、講義の準備草稿を 2013 年に刊行している。ヴァレリーとメルロ＝ポンティの講義がどのような点で交錯し、どのような点で異なっているのか、読み解く素材は揃ったが、まだ十分に研究はされていない。そこでザッカレロ氏と共同で、本研究を立ち上げることとなった。

3. 研究の方法

詩を作るとき、さらに絵、音楽、建築など、広く精神が作るという作業に取り組むとき、そこでは何が起こっているのか。そこに一回限りの偶然や霊感の産物ではない、明確に定義できる、精神の方法のようなものはあるのだろうか。ヴァレリーの詩学講義の読解を通して、この疑問に関するヴァレリー自身の考え方を読み取るだけでなく、メ

ルロ＝ポンティの視点を導入することで、読解にどのような広がりが出るのかを考察する。また、詩とは何か、文学とは何かという疑問をめぐって、メルロ＝ポンティの専門家だけでなく、ブランショやロラン・バルトの専門家にも協力してもらい、ヴァレリーの問題意識や考え方にどのような広がりがあるのかを議論する。

4. 研究成果

2024 年 3 月、申請者は PSF（パリ文理大学）客員研究員として、コレージュ・ド・フランスならびに高等師範学校で、ヴァレリーの詩学に関する一連の講演・授業を行った。その際、ザッカレロ氏が進行を担当、活発な質疑応答が交わされた。

6 月 27 日から 7 月 19 日まで、ザッカレロ氏が来日、ヴァレリーの詩学、メルロ＝ポンティの講義に関する研究交流を進め、とりわけ東大仏文の主催で、「《文学とは何か》――なぜ第二次世界大戦前後、フランスでこの問いが問われつづけたのか」を題するフランス語での研究集会を開催した（2024.6.29）。ザッカレロ氏、ヴァレリー研究の山田広昭・東大名誉教授、ブランショ研究の郷原佳以・東大教授、サルトル研究の澤田直・立教大学教授、カミュとブリス・パランの研究者渡辺惟央・慶應義塾大学研究員、ラウール・ドゥルマジュール東大准教授が参加した。ヴァレリーが問うた詩とは何か、あるいは文学とは何かという問いは、一見同時代の社会とは無関係な、芸術と文化に関する純粋な思索であるように見える。しかし、第二次世界大戦が勃発し、ナチス政権にフランスの半分が占領されて政治批判が許されず、さらに戦後、対独協力者を粛清すべきかどうかが大いに議論されていた時代、詩を作るという行為、さらに文学が精神にあたえる影響を考察することは、はたして状況とまったく無関係な営為なのだろうか。この研究集会では、それぞれの作家が詩と文学をめぐって何を考えたのかを探ると同時に、それが同時代の社会状況とどのように関連するのかを考察した。

この研究集会の準備として、HMC セミナーの枠組みで、郷原佳以氏と山田広昭氏をお招きし、「詩と政治――ヴァレリーとブランショをめぐって」と題するセミナーを開催（2024.5.8）、文学と政治の関係が問われるようになった 20 世紀という時代について研究発表と討論を行った。また、ザッカレロ氏と明星聖子・成城大学教授をお招きし、「Philosophy and theory from the standpoint of their manuscripts and archives : the AITIA project, a transcultural perspective」（哲学と理論を草稿・アーカイヴという視点から見たとき――AITIA プロジェクト、文化の越境を見すえて）と題するセミナーを開催（2024.7.3）、詩学、哲学の草稿をアーカイヴとして捉え直す試みを行った。ザッカレロ氏は新しい概念が作りだされるとき、そこにかならず多様な伝統、異なった思想背景、複数の言語の横断が見出されることに着目し、草稿や書簡などのアーカイヴの国境を越えたネットワーク構築を提唱、数多くの研究センターやアーカイヴをネットワークで結ぶ AITIA プロジェクトを立ち上げている。明星聖子氏はカフカの専門家であり、編集文献学の手法を取りいれて、テクストの多様なあり方を追求する研究者である。このセミナーを通して、講義録のように、明確な形を持った本とは異なるテクストから何を読み取るのかを考察することができた。最後に、成城大学で研究集会「哲学を趣向とアーカイヴの視点から見る」（2024.7.15）が開催され、ザッカレロ氏の講演と、明星聖子氏、パルカル研究の山上浩嗣・大阪大学教授、メルロ＝ポンティ研究の村瀬鋼・成城大学教授、塚本によるディスカッションが行われた。

出発点は、ヴァレリーの『詩学講義』を読み解くことだったが、多彩な研究者の協力が得られたことで、一方では文学と社会との関わり、他方では理論や哲学に関係する草稿が、相互にどのように関係し合うのかという視点からもこの問題を検討することができるようになった。研究をさらに発展させてゆく道筋が、今回のプロジェクトを通して見えてきた。

5. 主な発表論文等

〔図書〕

塚本昌則『写真文学論――見えるものと見えないもの』、東京大学出版会、2024.5、320p.

〔雑誌論文〕

— Masanori Tsukamoto, « L'inhumain , l'imagination selon Valéry »（「非人間的なもの――ヴァレリーは想像力をどのように捉えたのか」）, *Valéry au collège de France,* Sous la direction de William Marx et Matilde Manara, Collège de France（近刊予定）

〔学会発表〕

— Masanori Tsukamoto, « Les recherches sur le rêve chez Valéry, Proust et Myōe »（「夢の探究――ヴァレリー、プルースト明恵をめぐって」）, Paris, Collège de France, 2024.3.6

— Masanori Tsukamoto, « Mishima et la poétique de l'inhumain »（「三島由紀夫と非人間の詩学」）, Université Paris Sciences & Lettres, Programme gradué Translitteræ : Cycle « La poétique de l'inhumain », École normale supérieure, 2024.3.7

— Masanori Tsukamoto, « Valéry et la poétique de l'inhumain — autour du langage intérieur et de la parole parlante »（「ヴァレリーと非人間の詩学――内的言語と〈語る言葉〉をめぐって」）, Université Paris Sciences & Lettres, Programme gradué Translitteræ : Cycle « La poétique de l'inhumain », École normale supérieure, 2024.3.15

— Masanori Tsukamoto, « Bêtise, bestialité et poétique — Valéry et Flaubert, autour de *La Tentation de saint Antoine* »（「愚かさと動物の詩学――ヴァレリーとフロベール：『聖アントワーヌの誘惑』をめぐって」）, en dialogue avec Anne Simon, sur « *La Légende de saint Julien l'Hospitalier* », Université Paris Sciences & Lettres, Programme gradué Translitteræ : Cycle « La poétique de l'inhumain », École normale supérieure, 2024.3.21

— Masanori Tsukamoto, « La notion d'implexe et la poétique de l'inhumain — Valéry et Merleau-Ponty »（「錯綜体という概念と非人間の詩学――ヴァレリーとメルロ＝ポンティ」）, Université Paris Sciences & Lettres, Programme gradué Translitteræ : Cycle « La poétique de l'inhumain », École normale supérieure, 2024.3.28

〔その他〕

6．招聘フェロー（海外招聘者）からのコメント

Senior researcher at the "Institut des Textes et Manuscrits Modernes" (ITEM) a unit of the French National Centre for Research (CNRS) hosted by Ecole Normale Supérieure in Paris, I have travelled to Japan between June and July 2024, on a research mission at the invitation of Prof. Masanori Tsukamoto from Tokyo University.

Beside several working meetings with colleagues and students, I could deliver four talks during my professional journey.

The first in French, as the keynote speak in a workshop entitled "Qu'est-ce que la littérature ? une interrogation en France autour de 1945 " organized by Prof. Tsukamoto at Tokyo University (Hongo) on 29th June. My paper (« *Silence, ultra-silence, littérature du silence : l'avenir de l'expression selon Maurice Merleau-Ponty* ») has been followed by a Q&A time with the other speakers and the audience.

My second talk, in English, has been given online from the premises of the Tokyo University Humanities Centre,

in a dialogue with Prof. Tsukamoto himself and Prof. Myojo Kiyoko, Sejo University. The title of my presentation was “Philosophy and theory from the standpoint of their manuscripts and archives: the AITIA project, a transcultural perspective”. In this paper I have been underlying the importance of archival materials for a transcultural approach in humanities, on the ground of the international research network I have been coordinated in the past five years.

The third conference has been given in Kyoto (6th July), at the invitation of Prof. Takashi Kakuni, at the presence of several Japanese specialists of French phenomenologist Maurice Merleau-Ponty. The title of my paper was “La littérature, philosophia prima: Merleau-Ponty, lecteur de Valéry”.

My last paper has been delivered at Sejo University on 15th July: I have been presenting on “Philosophy from the Standpoint of their Manuscripts and Archives” dialoguing about my edition of unpublished notes by Maurice Merleau-Ponty with Japanese editors and translators of European philosophers.

All these events enabled me to cross regards with Japanese colleagues specialized in areas of research quite close to mine and they have opened up to further collaborations.